

# 「社会科特設学習」指導案

南風原中学校 教頭 内山直美

1. 単元名 沖縄特設授業「10.30から考える沖縄県」

2. 教材名 移民学習「世界に広がるウチナーンチュ」

## 3. 単元について

### (1) 教材観

中学校社会科の学習では、「地域」を取り上げる学習の充実が示されている。世界地理や日本地理を学習した成果としての「地域学習」は、特設授業として沖縄県と世界の地理学習を結びつける教材として有効であると考えられる。学習指導要領において「地域学習」は、地域の課題を見だし考察するなどの社会参画の視点を取り入れ、主権者として、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を育むことを重要視している。また、空間的相互依存作用に関わる視点として、地域の在り方を地域の内外の結び付きから捉えることなどが示されている。さらに、地域に関わる視点としては、地域の在り方を地域がもつ課題や地域がたどってきた変容、地域の今後の持続可能性から捉えることなども示されていることから、特設授業としての「地域学習」を結びつけ教材化を図り、世界と地域の課題の視点の提示と、持続可能な社会のあり方を思考する「地理的認識」の形成につながる。

本実践は、社会科学学習において、「沖縄県」を取り上げた学習を年間5回計画し取り組んでいる実践である。特に、戦後沖縄の歩んできた特徴的な日付を取り上げ、特設授業として展開している。これまで学んだ「4.28」「5.15」「6.23」「9.7」は、沖縄戦や米軍統治下の沖縄、さらに祖国復帰の学習など、戦争や平和に関する学びが中心であった。特設授業の最後に計画した近代沖縄社会における「移民」は重要な地域的視点がある。第2次世界大戦前後の「沖縄移民」に関しては、中学校社会科の授業で取りあげる事は少なく、全国的にも同様なことが言える。その背景には、「移民」の全体像がこれまで明らかにされてこなかったことや、「移民」が暗いイメージのまま捉えられていたことが考えられる。一方、移民者の体験は壮絶であり、想像を超えた人生経験を積んでいることが多い。そのため、移民者の人生は子どもの興味を引く。さらに、沖縄県は県内の一人一人が何らかの意味において移民と関係しているということも興味深い。親戚・知人の誰かが移民として海外へ渡っていたことも多く、「移民県」としても上位であることも関心を高めやすい。また、私自身、ハワイやブラジルでの研修に参加し、沖縄県系の方々が、ウチナーンチュのアイデンティティとネットワークを広げ、根付き、海外での生活を軌道に乗せた歴史に思いを馳せる。社会科の授業の一環として「移民」を学ぶ意味、先人達の勇気や苦勞、成功などを感じる授業を構成できたらと考える。

### (2) 生徒観（平成29年度にアンケートの実施）

平成29年度、「移民」に関する授業に取り組むに当たり、1年生133名にアンケート調査を行った。「沖縄について学ぶ特設授業の学習は積極的に学んでいますか」の質問に64.4%の生徒が「積極的」「どちらかというと積極的」と回答し、半数以上は興味関心を持って授業に取り組んでいる。し

しかし、3分の1の生徒はまだ主体的ではない。また、「世界のウチナーンチュという言葉を知っていますか」の質問に「ある」が44.7%でテレビや新聞などからの情報であることが分かった。しかし、半数以上は耳にしたことがないことが分かった。「移民のことについて直接話を聞いたことがありますか」の質問では、「ある」と答えた生徒は21.4%で、「移民」というキーワードは授業以外ではほとんどの生徒が聞いたことがない、学んだことがないことが分かった。

### (3) 指導観

学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の授業構造や「問いが生まれる授業」などが求められている。そのため、「見方・考え方」を働かせたアクティブ・ラーニングの視点による授業改善を図り、思考力・判断力・表現力の育成に努めたい。

ここでは、「地域学習」を社会的な見方（視点）として捉え、社会的な事象としての背景や原因を追究する中で、沖縄移民史、世界のウチナーンチュに関する実態や課題の解決に向け自分の意見を表出するよう手立てを行う。

## 4. ESDの視点との関連

### (1) 本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

- ・多様性・・・沖縄の歴史の中における移民者が、他国で活躍する場が与えられた事への理解。
- ・相互性・・・世界のウチナーンチュが、沖縄というアイデンティティを共有していることへの理解。
- ・連携性・・・沖縄県と世界のウチナーンチュが連携して大会を成功させようという連帯を理解する。

### (2) 本学習で育てたいESDの資質・能力

- ・多面的・総合的に考える力・・・移民という事象を通して、沖縄と世界の状況について考える。
- ・他者と協力する力・・・フォトランゲージ等の参加型学習を通して、他者と協力して考える。
- ・つながりを尊重する態度・・・自分の意見が尊重され、学習につながりをもって取り組む。

### (3) 本学習で変容を促すESDの価値観

- ・公平性（多様性の尊重）・・・沖縄の歩んできた歴史の多様性を理解、尊重する。
- ・連携性（つながりを尊重する態度）・・・世界のウチナーンチュが連携する意義を考える。
- ・責任性（進んで参加する態度）・・・沖縄の歩んできた歴史や文化について進んで学ぶ。

### (4) SDGsとの関連

- ・SDGs10「人や国の不平等をなくそう」・・・移民の背景について知り、その時代の生き方を知る。
- ・SDGs16「平和と公正をすべての人に」・・・世界のウチナーンチュの平和を希求する心を理解する。
- ・SDGs17「パートナーシップで目標達成」・・・世界のウチナーンチュがつながる意義を確認する。

## 5. 特設授業の評価規準

知識・技能	・地域の沖縄の現状を学び、歴史学習を通じた知識のみならず、地理的な技能、公民的な概念的知識を学ぶことで社会科として知識、概念形成の基礎を築く。
思考・判断・表現	・沖縄県の過去、現在、未来志向の学習を通して、課題を解決するための思考力、仲間との対話で学びを広げ、さらに、自分の考えをより深めること、表現する力を育成する。
主体的に 学びに向かう力	・特設授業として地域としての沖縄県を学び、現在の沖縄の姿、沖縄が抱える課題と結びつけながら、地域社会へ参画する力、発信する力を育成する。さらに、自分事の課題として深く学ぶ姿勢を身に付ける。

6. これまでの特設授業の内容

題材名と授業の様子	「ねらい」及び「主体的・対話的で深い学びの視点」
<p>I 「4. 28 から考える沖縄県」</p> 	<p>1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約により日本は独立したが、沖縄は米国統治下のもと住民の命や財産、人権が侵された。4月28日を知ることで、現代沖縄が抱える課題の歴史的背景を知る。</p> <p>①主体的な学び：沖縄の歴史の理解と今の沖縄の現状を繋げる                  ②対話的な学び：資料の活用、グループでの対話を通して広げる。                  ③深い学び：社会的事象について知る、背景を理解すること、自分の意見をまとめ表現することで、思考力、判断力、表現力等を養う。</p>
<p>II 「5. 15 から考える沖縄県」</p> 	<p>沖縄が祖国復帰45年を迎えるにあたり、復帰についての知識を習得するとともに、沖縄が本土に復帰した当時の記憶や体験のある方々から直に話を聞くことで、地域の歴史的事象に関心を持たせる。</p> <p>①主体的な学び：体験者から聞くことで身近に感じる。                  ②対話的な学び：資料の活用、グループでの対話を通して広げる。                  ③深い学び：社会的事象について知ること、背景を理解すること、自分の意見をまとめ表現することで、思考力、判断力、表現力等を養う</p>
<p>III 「6. 23 から考える沖縄県」</p> 	<p>沖縄戦が終結し今年で72年となる。生徒たちは、沖縄戦についての学習を小学校から毎年積み重ねてきている。沖縄戦について知識として習得するとともに、沖縄戦当時の記憶や体験のある方々から直に聞くことで、次代につなぐ沖縄戦の学びを体験する。</p> <p>①主体的な学び：体験者から戦争について聞き取る主体者となる。                  ②対話的な学び：身近な人と対話しながら戦争体験を聞き取る。                  ③深い学び：身近な人の戦争体験を互いに共有する。</p>
<p>IV 「9. 7 から考える沖縄県」</p> 	<p>沖縄市は平和の日を設定し、9月7日を「沖縄市民平和の日」としている。それは、沖縄戦の正式な終結の日であり、戦後沖縄市が歩んだ歴史の1ページとして記録する意味も込められている。沖縄市の取り組みに学び、戦後沖縄の歩んだ歴史の1ページに興味を持つことで、沖縄県の現状と結びつけて考えることができる。</p> <p>①主体的な学び：沖縄市民平和の日設定の背景を知り興味を持つ。                  ②対話的な学び：ペア活動を通して、自分の考えを広げる。                  ③深い学び：戦争終結「終戦」と現代社会をつなげて考える。</p>
<p>V 「10. 30 から考える沖縄県」</p>  <p>写真：H28のウチナンチュ大会</p>	<p>全国でも有数の移民を送り出し、戦前、戦後を通して海外に渡ったウチナンチュが、1世紀を超える歴史の中で、懸命な努力によって生活基盤と地位を築いている。外国という異文化社会に確実に根をおろし、それぞれの国や地域で沖縄の伝統や文化を継承しながらウチナーコミュニティは脈々と受け継がれている。現在では、子孫も含め、海外には約40万人の沖縄県系人がいると言われている。そのエネルギーの源について「世界のウチナンチュ大会」を通して学ぶ。</p> <p>①主体的な学び：新聞記事を活用、クイズで興味を持って学ぶ。                  ②対話的な学び：写真活用「フォトランゲージ」の手法で学ぶ。                  ③深い学び：世界のウチナンチュが沖縄を誇りに思う気持ちを考える。</p>

## 7. 本時の計画

### (1) ねらい

沖縄県は移民県であり、世界には約 40 万人ものウチナーンチュが沖縄の文化や絆を大事にし生活している。本時は、「世界のウチナーンチュ大会」の様子から、沖縄県系の人々の沖縄を誇りに思う気持ちや、文化の継承やアイデンティティの確立に対して自分の考えや意見を述べることができるような授業展開に取り組む。さらに、沖縄移民を学習することで、地域の特性や他地域との共通性を学び、自分の地域を誇りに思う気持ちや地域へ参画する力を育成したい。

### (2) 主体的・対話的で深い学びの視点

- ①主体的な学び：「世界のウチナーンチュ大会」の映像視聴やクイズで興味を持って学ぶ。
- ②対話的な学び：写真活用「フォトランゲージ」で、移民 1 世時代の生活の様子を大観する。
- ③深い学び：「世界のウチナーンチュ」が沖縄を誇りに思う気持ちを考える。

### (3) 授業の実際

	主な学習活動・内容	指導・支援の留意点
導入	1. 「世界のウチナーンチュ大会」の映像 ・昨年度の「世界のウチナーンチュ大会」の広報映像と歌を試聴する。	・学習課題を見つけるために、映像視聴やウチナーンチュのインタビュー映像を見て、視点を導く。
本時の学習課題：「なぜ、世界のウチナーンチュは沖縄を誇りに思うのか」		
展開	2. 「世界のウチナーンチュ」クイズ (1) 沖縄から海外に移民した人の割合 (2) 日系人の多い国はどこか (3) 現在およそ何人の日系人がいるか (4) 現在およそ何人に沖縄県系人がいるか (5) 沖縄県系人はどこの地域に多いか  3. フォトランゲージ ・8枚の写真から、沖縄移民の歴史の1ページに触れる。  4. フォトランゲージの発表と教師の解説 ・8枚の写真の国名や時代背景、移民者の生活などを解説する。	・沖縄県は日本有数の移民県である。1898年(明治32)当山久三が26人の移民を送り出してから、沖縄県からの海外移住者は、戦前・戦後あわせて約10万人あまりにのぼっている。現在では、全世界で沖縄県系人が約40万人いると言われている。 ・沖縄の人々が世界に飛び立った現地の写真にタイトルをつける。(いつ頃、どこの国、どのようなことが写真に写っているか)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1902年 ハワイ・オアフ島</li> <li>・1910年頃 ブラジル・サンパウロ</li> <li>・1910年頃 カナダ西部</li> <li>・1940年頃 フィリピン・ダバオ</li> <li>・1940年前後 ペルー・リマ市</li> <li>・1960年頃 ボリビア・オキナワ移住地</li> </ul>		
終末	5. 世界のウチナーンチュが沖縄を旅立つときの気持ちを考えよう。 ・「片手に三線を」の視聴と、アルベルト城間のメッセージを読む。	・沖縄にとどまるのではなく、世界に羽ばたいて世界を知ることは、沖縄の良いところの発見にもつながる。沖縄は世界を平和にしている島でもあることに気づかせる。

### (4) 評価

- ・沖縄県系の人々の沖縄を誇りに思う気持ちや、文化の継承やアイデンティティの確立に対して自分の考えや意見を述べることができる。(思考力・判断力・表現力)